

雪峯に関する資料の検討

鈴木哲雄

はしがき

玄宗皇帝の愛顧を受け、河北の三鎮を掌握して強力な軍

閥を誇っていた安禄山が、叛旗を翻して一挙に洛陽・長安を陥し入れると、さしもの唐朝も、次第に混濁の増壘と化していった。財政の逼迫を塩の専売と兩稅法で切り抜けようとしたが、重税は次第に反政府勢力を増大せしめていた。党派争いと宦官の跋扈に明けくれる政治の中には、ものはや民衆の怨嗟の声を聞きとどける耳を持たなかつた。一度王仙芝・黃巢の乱が起こると、それは燎原の火のようにまたたくうちに全国に広がり、乱は乱を呼んで、唐王朝は互解の路に陥ち込んでいった。

昭宗を殺し、十三歳の哀宗を位につけて、官僚の大量殺戮を行なった朱全忠は、ついに位を譲らせて後梁の太祖と

なつた。地方の実力者はもはや唐朝をたてる名分はなくなつた。次々に王国を名のつて五代十国という、それぞれが短命な分裂国家の時代に入つたのである。

雪峯義存は八二二一九〇八年の人であるから、まさしくこの唐末の混乱の中に生きた禪者であった。会昌の沙汰（八四五）で仏教はひどい打撃を受けた。教学の仏教はもはや昔日の面影はなくなつてしまつた。禪者の打撃も同じではあつたが、早くも勢を盛返して來ていた。そういう波瀾を通じて、福建という一地方にありながらも、雪峯の禪は耳目を集め華々しさがあつた。雪峯の禪は必ずしも一個人、一地方に限られぬ禪全体の生命力を示していると思う。雪峯の研究を通じて、禪思想の特徴を少しでも明らかにしたいと願つてゐるのである。

一 『雪峯語録』の刊行について

雪峯義存を研究するに当っては、雪峯のことについてまとめてもらっている『雪峯語録』はどういうものであるか

を、まずもつて知つておく必要があろう。雪峯の語録は古来種々あつたようであるが、ここでは容易に見られる、元

禄十五年刊である、大和屋重左衛門が上梓した流布本について、検討をこころみたい。この本は元祐通卷一一九

（二、二四、五）に載録せられており、近時、柳田聖山主編「禅学叢書之三」である『四家語録・五家語録』の付録として、一九七四年二月中文出版社が、その原本の花園大

学図書館蔵本を影印したので、一層容易にみられるようになった。

この語録の編集次第は次のとくである。

雪峯語録編集次第

1 刻雪峯語録縁起	一六三九年	林 弘衍
2 雪峯禪師語録序	一六三八年	石雨明方
3 附余集生居士答黃元公居士書		林 弘衍
4 雪峯真覺禪師語録卷之上		林 弘衍編次

(1) 上堂語等

5 雪峯真覺大師語録卷之下

(1) 大王請師与玄沙入内論仏心印錄 妙徳編

(2) 上堂語等

(3) 師偈語

(4) 師規制 永明寺智覺禪師延寿立石
九〇八年四月二十八日告示

(5) 師遺誠 九六五年吳越國王俶立石

6 跋 一三二一年 悟逸

7 雪峯真覺大師年譜

8 雪峯語録大尾 一七〇一年 元祐

9 附錄

(1) 福州雪峯山真覺大師語録序 一〇三二年

(2) 雪峯真覺大師広錄後序 一〇八〇年

(3) 題 慧真

(4) 雪峯真覺大師偈頌並序 慧蟾

(5) 雪峯崇聖禪寺碑記文 胡 澄撰

一四三三年

姚 銑書
良琛立石

(6) 补版贊 一四〇三年

希孺

孫 王 隨
覺

(8) 次韻二十四景詩

一四五七年 源潭

(9) 二十四景總詩

智明

(10) 誌
一四八四年

智明

(11) 識
一五八六年

定明

(12) 喜捨芳名

一七〇一年 卍山

(13) 書
奥付

右の内で最も注意すべきことは、卍山道白が「大尾」を書いたあと、梓行間際に別本を得たので、それも併せて梓行したということと、その間の比較を示してくれてあることである。上の編集次第では(9)(13)に当る末尾の文にそのことが記されている。編次の前後するものがあり、語句の小異もあるということではあるが、卍山の言葉に従って、

第一本と別本と、卍山が大尾を書いて梓行した流布本との比較をすると、次のようになる。

流布本	第一本	別本	流布本	第一本	別本
3 2 1				5 4	
○ ○ ○				(2) (1)	
○ ○ ○					
○ ○ ○					
○ ○ ○					

この表で明らかかなように、卍山の見た第一本は付録の部分がないものであった。そして上梓間際にみた別本は年譜がなかつたのである。では林弘衍の編集した『雪峯語錄』そのものは一体卍山の第一本であったか、別本であったか、ということが問題となつてくる。こういう問題は諸異本を通して考察すべき書誌的課題であるが、寡聞にしてまだ諸本のあることを知らないし、目録等で一二、三を知り得ても簡単に見ることはできない。今は流布本を詳しく見て、そこからできうる限りの考察をなしてみたい。

林弘衍はどんな書を見て編纂したかという素朴な質問がまず起ころ。彼は「刻雪峯語錄縁起」の中で、「雪峯の遺

9 8 7 6	(4) (3) (2) (1)	(5) (4) (3)
	X X X X X ○ ○ ○ ○ ○	
	○ ○ ○ ○ X X ○ ○ ○ ○ ○	
		(13) (12) (11) (10) (9) (8) (7) (6) (5)
	X X X X X X X X X	
	X ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	

語を求めたが、虫くいのひどいものの中で、二、三を得ただけであった。たまたま支提上人が一帙を見させてくれたので、喜んでみたのであるが、錯簡が大変多くて、ただ苦しむだけであった。そこでそれを持って青林・曹源の二人と旧本を捜し求め、考訂したのである。」と言っている。石雨明方も序の中で、「雲水に従つて完本を得た」といつているから、旧本に支提上人の示されたものを校合して出版したわけである。しかも語録の最初に「林弘衍編次」とするから、語の順序を変えて形式を整えようとしたことは確かなことである。

そこで林弘衍の編集した『雪峯語録』そのものは一体円山山の第一本であったか、別本であったか、ということになる。結論から言うならばそのいずれでもないと考へる。即ち1~6までがもとのものであったと思われる。その理由の第一は「年譜」の問題である。円山のみた第一本には年譜があつたが、別本には年譜がなかつた。別本は雪峯に関することを少しでも多く採録しようと努めている。もともと林弘衍の編集において年譜が収められていたのであるならば、肝腎なそれを取り除いて刊行することはあり得ないことである。逆に言えば、別本の付録はあとになつてか

ら、広く拾い集めて、後にくつつけたものであろうと思われる。第二の理由として、『新纂禅籍目録』によれば、『雪峯真覚大師紀年録』なるものがあり、これは宝聞編で、徑山徳光（一一二一—一二〇三）の弟子の准海元鑑が校定したものである。筆者はまだこれを見ていないが、『目録』では「年譜」と「蓋し同本か」と言つてはいる。宝聞とはおそらく宝聞大師南岳惟勁のことであろう。南岳惟勁は雪峯の弟子で、後に南岳に入り、『続宝林伝』や『南嶽高僧伝』を書いた人で、年譜作成者としてふさわしい人物である。著者が諡号を用いることはないが、これは准海元鑑が校定した時に改めたとみれば、何ら問題はない。年譜は相当詳しく書かれている。例えば布施や寄進などの情況は、事情に詳しい人でないと到底書けない。この点からみて「年譜」は非常に古いものであり、『目録』がいうように、『紀年録』と同一本だと思われるのである。『紀年録』は別行本で古くからあつたのであるが、林弘衍はこれに気づいておらず、自分が編次した語録の上下二巻に、底本のなごりを留める悟逸の跋だけを載せて刊行したのであった。第三の理由として、語録の文頭は「雪峯真覚禪師語録卷之上」とあり、下巻の文頭は「雪峯真覚大師卷

之下」とあることである。前者は「禪師」といい、後者は「大師」といつていて。編者においてこのような混用はあり得ない。この点を推すと、上巻と下巻と刊行年次の違うものを合して、改めて一本として刊行したと思わざるを得ない。年譜は「雪峯真覚大師年譜」というから、下巻と同じく大師の呼び名で統一している。すると下巻は年譜を後に付した刊本であったとも考えられるのである。そうすると、上巻は年譜を付する以前の刊本であると考えられ、林弘衍の刊行のものとみられるのである。以上の理由から、林弘衍が刊行した一六三九年から、円山が目を通して大和屋重左衛門が一七〇二年に梓行するまでに、少なくとも四回の刊行のあつたことが想定される。第一は林弘衍のもの、第一は年譜を付したもの、第三は第一の上巻とそれから第二の下巻と年譜を合したものであり、これは円山の第二本である。その間に別に第四として林弘衍のものに付録を加えたものがあつたはずで、即ち円山の別本である。

林弘衍は雪峯語録より先に『福州玄沙宗一禪師語録』三巻を刊行していた。雪峯語録と玄沙語録は一对をなすもので、形式はよく似ている。それは恰も『鴻山語録』と『仰山語録』の関係に似ている。それから雪峯語録巻下の最初

に、玄沙と入内して仏心印を論じた折の妙徳の筆録したものが載せられているが、林弘衍の編次の中にあつたものかどうかという問題点もある。因みに光化三年（九〇〇）に鼓山智嚴が編集した『福州玄沙宗一大師廣錄』があるが、先に『玄沙語録』を編次した林弘衍はこれを知らなかつたようである。廣錄には仏心印を論じた語が載つてある。玄沙の研究は廣錄の方を第一資料としなければならない。

次に付録に収める中で、語録に関する事を一、二瞥見してみよう。中でも注意すべきは、王隨が『福州雪峯故真覺大師語録』の序を書いていることである。それによれば、雪峯山の守助が『雪峯真覺大師語要』一軸を持ってきて、それに幾つかの言葉を加えて語録の体裁を整え世にあらわしたいという願から、その序を乞うたがために、その求めに応じて書いたのである、という。この語録の刊行は王隨の序から一〇三二年であるとわかる。王隨は首山省念の在俗の弟子で、特に『伝灯玉英集』十五巻を刊行したことで知られる人物である。次に一〇八〇年の孫覺の後序を付している語録もあつたはずである。これによれば、王隨の序を載せた語録も既に失なわれているようで、雪峯の語を拾い集めて、重複を刪つて、『雪峯真覺大師廣錄』⁽¹⁾を刊

行したのである。幸い王隨の語錄の序文が石に刻まれていたので、それを併せて載せたのである。また守方慧真なる人も勧募して旧版なるものを刊行している。一四〇三年には希儒が補版した。これら四本のそれぞれの関係については何らわからぬ。

一四五七年を明記する源潭の『雪峯禪寺二十四景詩』と、おそらく鼓山の八十五世の智明のものと思われる『次韻』と、智明の『總詩』を続集として収めて、性庵明が遺帙を校定して一四八四年に刊行している。更に一五八六年にも雪峯の定明が語錄を刊行している。

このように林弘衍が刊行する以前に度々語録が刊行されていたのであるが、いずれも永く保存されることもなかつたのは、法眼宗雲門宗の退朝そして折角と直婆関係するで

あろうが、それ以上に雪峯の位置づけの曖昧さに何よりも起因するであろう。度々の語録の刊行も雪峯山という辺地においてなされていることで、限られた地域に閉されてしまったといふことも一因であろう。

二 語録の内容について

雪峯について知ろうとするならば『祖堂集』『景德伝灯

「雪峯語錄」と各灯史との対照表

『錄』「宋高僧伝」「福州雪峯山故真覓大師碑銘」等があるが、思想面を研究するとなると、一般に語録が第一の研究対象とならねばならない。しかしみてきたように、林弘衍の語録は明末清初のものであって、時代的にみてもひどく隔つており、とてもそのまま検討もなくして用いることはできない。そこで語録中の語はどのような載録の仕方がなされたか調べてみる必要がある。それも雪峯になるべく近い書と比較してみなければならない。ここでは『祖堂集』『伝灯録』『宗門統要集』『聯灯会要』の四本選んで対照し、また別に一、三の書とも照合した。煩を避けずにその表を次に挙げる。

23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6
弓弦作橋梁	至万丈崖邊	方外不挂寸絲	不託三寸	合取兩片皮	不犯目前機	君臣道合時	古今相伝	医生門下多病鬼	是汝自己事	近入叢林	莫觸諱	真俗二諦	初心後心	打鐘打鼓上來	要識末後句	謁德山	辭洞山
															22 (105)	4 (100)	2 (99)
															21 (327c)		
															2 (27a)	24 (34b)	11 (30b)
															15 (392d)	29 (393d)	5 (391d)

分祖、
を一
く部

41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24
不錯事	大人相	和尚家風	老胡家風	臨河渴死人	者裏事	顛面事	向上一路	三寸能殺人	能活人	祖意教意	三世諸佛是	不惜口許商量否	不與一物為隣	以払子轟口打	擬親即疎	至尊至貴	噭鑑時

何親近

8 (327a)	2 (327a)	7 (327a)	2 (327a)

16 (393a)	14 (392d)	13 (392c)

すの伝、
31
と語録
合

すの伝、
39
と語録
合

59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	維摩文殊 対談何事
三乘教外別伝	路逢達道人	我是俗人	水牯牛年多少	虛空釘橛也無	從定州來一	衲衣下事	箭頭露鋒時	文彩未分時	師倒臥	洞山道吾於此切	寂然無依	瀑布巖前	手淘金	西來意	一撥前	苦海無舟	百不思時	
8 (102)	9 (102)						7 (101)	6 (101)			5 (101)							
13 (327) b)	18 (327) b)						12 (327) b)	11 (327) b)	6 (327) a)	10 (327) b)					9 (327) b)			

77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	百不思時
向上一路	雪峯主是誰	急要相投迅速者	四十九年前事	如何是仏	遠遠來者	觀面事	鬚髮染衣	國師三喚	如何是渾崙	如何是一劍	西來意	作麼生共佗商量	語話分	不為凡夫開演事	神光來	直得面前不分		
23 (105)												10 (102)						
23 (327) c)						4 (327) a)	40 (328) a)					15 (327) b)	37 (328) a)	14 (327) b)				

異文祖 なるや るや 文字	や 伝 文 字	す座傳 の問 と典

95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78
阿那箇是雪峯 觸目事	頂外事	諸仏出身處	覲面相呈時	句外事	触目事	牧童歌	不犯時節者	香尽毗盧時	拵面來時	不問不答時	最親處	海闊雲深	直問	急要相投	見智者也無	仏向上事	

雪峯に関する資料の検討
(鈴木哲)

17 (327 b)	44 (328 b)
29 (36 a)	

少伝、
し文く
統、
語、
あり
沙玄

113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96
西院大師遷化	学人本分眼	第一拳	諸仏有何過	把即落有	擬即成点汚	長大不語	相撲下得第一拳	出世中事	間即累及祖宗	如何是法身	近視遇時	道不得處	三乘教外別伝	宝劍懸空時	吹毛之劍	我眼本正	隨分与人説

11 (102)	27 (105)
29 (328 a)	3 (327 a)

異なる文意
を含む割注

如何是玄学

131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	117	116	115	114
句外事	其中事	古人格	近事作	触目事	文采未	辞面来	步内一旨	如何是異類	拍盲底人	奇特事	学人本分事	靈觀常閉門	尽大地沙門	上堂、一僧	救火救火	滙山來	如何是玄学

鳥石章
102

鳥石章
292章
c

28
(327
c)
22
(34
a)
31
(38
b)
23
(393
a)

20
(393
a)
23
(393
a)

藏とcf
『正閑語
41法連錄
b眼?294
しよ統とcf
り関語
文語錄
多錄?197
伝
沙の語
玄
統
の語

149	148	147	146	145	144	143	142	141	140	139	138	137	136	135	134	133	132
悄然無依時	生死海闊	邈志公真不得	嚴凝之際	元正一日	兩字尽是科文	隨照失宗	帰根得旨	請師直道	学人眼	擬帰鄉去時	含容方丈	空王殿	密救人	古閑不転時	琢磨事	本来本師	省要處

38
(109)

5
(327
a)

増祖、
加
文末
あり
割注

167	166	165	164	163	162	161	160	159	158	157	156	155	154	152	151	150
未尽其機	刺頭入言句裏	者箇七八尺漢	若未省取好	怎麼承當最好	因喫飯處	盡乾坤大地	趙州無賓主話	大德曾為天使來	師一日採得箇木蛇	我者箇為中下根人	觸目菩提	搬柴來	大小祖師	箇人從地積黃金	虛空作眼	万法歸一

雪峯に関する資料の検討（鈴木哲）

								大安 267章 c	25 (327 c)							
7 (29 b)									15 (32 a)							
30 (394 a)									19 (393 a)							
										類語や統 似録異 286な文 とるや	ありや伝 りや 割異文 注な字					
184	183	182	181	180	179	178	177	176	175	174	173	172	171	170	169	168
如何是第一句	什處逢達摩	師驀然指一椀水	金屑雖貴落眼成翳	豈不是以心伝心	余畠田見一條蛇	到甘贊行者處	羚羊挂角	仏未出世時	瓦官在德山	好造箇無縫塔	運足焉知路	仏未出世時	焚却四十本經論	閻王送銀交牀	如何是密旨	
12 (102)					鏡清3章	玄沙3章								28 (105)		
長生 349章 c	童冊 348章 c	巖頭 326章 b	38 a		童冊 348章 c	玄沙 345章 c	甘贊 279章 b	45 a						43 (328 b)		
25 (35 a)																

着の祖
語法
な眼割
しの注

眼清問祖
(
藏者
55
正は
c
法鏡統

後半
あり
後半
異な
傳、
割注

雪峯に関する資料の検討（鈴木哲）

218	217	216	215	214		213	212	211	210	209	208	207	206	205	204	203
黃巢過還收得 劍麼	平田淺草塵鹿 成群	得溜麼尊貴	當々密密地	論仏心印錄		知者一下子好	達摩不來唐土	南際間無有對	盡乾坤若凡若聖	閻王問擬蓋一所殿	不得	擗面來時如何	狗子有什麼罪過	入畜內坐	僧與師造籠子了	
巖頭 326章 c		27 (327 c)										14 (102)				
		26 (35 a)										30 (328 a)				
		18 (393 a)											27 (35 b)			
やの伝、 異部、 な分割 るや注	々冊cf198統広cf 密章伝、 々「 「堂童	cf c 126「玄 下沙										語cf 録『玄 沙				

235	234	233	232	231	230	229	228	227	226	225	224	223	222	221	220	219
汝得入處作麼生去	從上諸聖什麼生去	晏國師初參師	有一天使到庵	黃涅槃予知師至	此門有箇老鼠子	指日示之	在中庭臥	太原孚遊浙中	可觀初參師	其中無一人納子拋時	將三箇木毬一	如冰帰水	此事如似一片	玄沙辭師下山	有拄杖乞一条	見色便見心
32 (107)	15 (103)	3 鼓山 351章	59													龍冊章 3 47
26 (327)	20 (327)	鼓山 351章		太 原 360章	太 原 360章	太 原 360章	太 原 359章	太 原 356章	金 輪 355章	竜 興 章						龍冊章 3 348章 c
		a		a	a	a	c	a	c							
				28 (35 b)	36 (37 a)					39 (38 a)		35 (37 a)				
						24 (393 c)	22 (393 b)						17 (393 a)			

句文祖『正異文伝や祖
あ末、12法な字、異
りに文 c 眼るやーな文
語前 藏』や部るや
と伝する
と睡興語
誤竜宗録、
まる道靖
溥を竜

252	251	250	249	248	247	246	245	244	243	242	241	240	239	238	237	236
世界闊一尺	古潤寒泉時	雲門參睦州	作麼生是大光	我為汝得徹困也	水辺立	從迦葉門入	開却路達摩來也	研到心頭且住		夏在甚麼處	有個把斷乾坤漢拋	把三個木毬一路	大事作麼生	仏向上事	從上諸聖伝授	
20 (104)					24 (105)					34 (107)						長慶章 3 67
玄沙 345章 c					鴻山 285章 a					19 (327 b)	41 (328 a)					
						長生 349章 c										長慶章 3 347章 b
19 (33 a)									21 (34 a)							
43 (395 a)					41 (395 a)				32 (394 b)				27 (393 c)			

を祖 藏『で中伝や祖
付 正のほ、異
す後 62法みど文な文
半 d眼 まのるや
すにりや祖
偈 を文異文字
付末な字
るや聯藏『正
や異後48法
眼 半d眼
な伝、文末
や祖、語
異なるや

269	268	267	266	265	264	263	262	261	260	259	258	257	256	255	254	253
言無不中	招慶特來辨茶	全學全無学	請稜道者住	道路不易且	生死海未渡	声聞見性如夜見月	僧礼抨師師五打棒	負一束藤路逢一僧	見獮猴	晏国師住鼓山	買得一箇黑老婆子	輶三箇木毬示之	透網金鱗以爲食	光境俱忘	鏡清初參師	開封祇見三張白紙

長
3
生
3
章
43
鏡
清
章
46

巖頭	34 (328 326章 c)	長生	三42 (聖328 350章 a)	長生	玄沙
		a	a	a	c
4 (28 b)	6 (29 a)	13 (31 b)			
35 (394 c)	42 (394 d)	31 (394 a)			

語 異 なる や る	や 伝 や 文字	すへ 伝 の 問 長 と 生	伝 や祖 な し や 文字 文 末
------------------------	-------------------	----------------------------------	--

284	283	282	281	280	279	278	277	276	275	274	273	272	271	270	
一片地好無縫塔	胡來胡現漢來現漢	藍田來	象骨峯有仏也法無	日織多少	來時日出也未	臨濟有三句	不彫弟頭作一柄木杓	住持不易有牛具	拈起盃孟	識得即知去處	向火焙裏転大法輪	長生戴笠子先行	南山有一条鼈鼻蛇	如粟米粒大	
42 (110)	33 (107)													54 (114)	

玄沙	32 (328 345章 c)	太原		長生	長慶
	a	360章 a)		a	b
42 (38 b)	17 (32 b)	16 (32 b)	20 (33 b)	14 (32 a)	1 (26 b)
11 (392 c)	37 (394 c)	40 (394 d)	28 (393 d)	26 (393 c)	8 (392 a)

る や 文 末	伝 や 文 末	あり 祖 後半	異統 なる 文字	後あり雲統僧峯統るや伝 半り門とを聯、や あり聯の雪いうに清 あり語賣うに清	逆門玄な と沙し、 語と が雲 後半
------------------	------------------	---------------	----------------	---	--------------------------------

301	300	299	298	297	296	295	294	293	292	291	290	289	288	287	286	285		
入滅	塔銘并叙	送南際長老	緊要處乞師指示	輦出木毬	封柑橘各十顆送	把手拽伊不肯入	參鳥石觀	如何是仏	飯籬邊坐餓死人	這箇為中下	嶺外來	前三三後三三	浙中來	來禮拜和尚	夾籬次	望州亭与偶相見了		
															13 (102)			
																保福		
																354章 c		
32	30 (36 b)	40 (38 a)	38 (37 b)									39 (388 a)	35 (328 a)	31 (328 a)	16 (327 b)			
25 (393 c)	21 (393 b)	12 (392 c)														5 (29 a)		
中統 ば ま で												cf 語錄 119	cf 語錄 156	藏『正法眼藏』の着語	あり湖祖、伝、後半	なし	伝、後半	も保福し、割 藏『正本法眼』の語統注

右の表はまだ完全とはいえないが、この比較によつて幾つかのことが明らかとなつてくる。

(1) 林弘衍のこの『雪峯語録』は、種々の本から拾い集めたものである。そして或る程度時代順にし、機縁の語、上堂語、短かい問答、長い問答、有力な弟子たちとの問答に区分した。しかしその区分がはつきりと意図的であつたのではなく、底本もしくは収集した語の本に或る程度従つている。

(2)『祖堂集』『宗門統要集』は直接見ていないであろう。『祖堂集』は早くから忘れられた書となってしまって、見ていなきことは、文字文脈の違いの最も大きいことでもわかる。それに仮に見ているとするならば、少なくとも雪峯章は全て載せていなければならぬはずである。但し「¹⁷¹焚却四十本經論」は祖堂集にだけ載っているのであるが、何によつたか不明である。ソースを辿つていけば祖堂集中行きつくかもしない。

(3) 「宗門統要集」も見ていないであろう。『聯灯会要』は統要と密接な関係を持つてゐる。即ち会要是統要よりも多くの語をそのまま引いてきているのである。「88 牧童歌」

「195天晴好普請」「224將三箇木毬一時拋」は統要だけにあらから、会要以外に統要も見ているのではないかという疑問も起つ。しかし、例えば195は、「天気が良いから普請するにいい」と言ったのは「長慶」になっているが、統要では「僧」となっている。また224木毬については、玄沙がひとり雪峯の意を知り抜いて、参学者に禅機を示しているのであって、これに関する話は三箇所も出ている。参学者はその禅機を記憶し、また記録に留めておいたことである。それは一回限りの提示ではなかつたようである。そうするといろいろな伝わり方が生じたはずである。統要看たとは言えない。第一、明末清初に、統要がそれだけの影響を与えたであろうか。ただこれも出典を辿つていけば、統要に出会うのかもしれない。

(4)『統要』と『会要』とでは、表面的な形式が同じであるという類似点だけでなく、文字まで殆ど同じである。ただし、配列が変更されていること、場合によって他章に入れられていることがあること、著語者に変動のこと、長いものについては、要約しているところもあるというところは違つてゐる。統要が建溪の宗永の選述であり、同じ福建人といふことも思い合せると、統要の影響を受けてい

ることがはつきりしてくる。このことについては後の研究を俟ちたい。⁽²⁾

(5)『伝灯錄』『会要』は『語錄』と共に通点が多いが、やはり文字の異同まで当つていくと、とても直接見ていたとは思われない。但し林弘衍が直接見ていないくとも、そのテキストとなつてゐるものは、伝灯錄・会要の影響をはつきり受けている。

(6)『正法眼藏』は直接に結びつきはない。会要を通しての間接的結びつきである。

(7)以上の書に載つていないもので、『語錄』に雪峯の語として載せられているものは、今、どういうところから引いてあるか不明である。上巻に、そして短い語に多い。雪峯の語録はそれまでに度々出ていた。それらの残簡の中から拾い集めたのである。それはもともと参学者のメモの寄せ集めであつたろうから、似た問答も出てきている。典拠がはつきりしないからといって軽くは扱えない。

(8)結局雪峯を研究する場合、『祖堂集』等のような古い書にあるものは、これに基づいた方がよい。それらにないものは、研究の補助材料として用いるのがよい。

(9)このように見てみると、雪峯を知る上において『雪峯語

録』はあまり価値のないものに思えるかもしれないが、しかし次のものは第一資料として用いるべき重要なものである。

(1) 「214論仏心印録」——『玄沙広録』の中にあるものと同じである。『広録』は雪峯、玄沙が存命の九〇〇年に成立している。

(2) 「300塔銘并叙」——雪峯が自ら書いたものである。

(3) 「師偈語」——偈頌を集めたもので、かなり早い成立であると思われる。二、三『祖堂集』等に載っているが、他に載っていないものが多い。

(4) 「師規制」——永明延寿が石に彫って立てたもので、雪峯の告示である。

(5) 「年譜」——先の節で述べたように、南岳惟勁の選述と思われる。

(6) 鴻山と仰山との関係のように、⁽³⁾雪峯と玄沙との関係は密接である。『玄沙広録』は『雪峯語録』をみる上でも参考せねばならない。

以上、『雪峯語録』の成立の経緯と語録の分析を通して、何が重要であり、どういう取扱いをしたらよいかをささか明らかにしえたと思う。

三 雪峯の碑文の意訳

雪峯の研究の基本資料として、もう一つ最も大切なものが碑文がある。これは当時の文筆家である福州の黃滔の選述したもので、『全唐文』卷八二六に載っている。この碑文は『宋高僧伝』の雪峯章に全面的に依用されている。試みに意訳しておくる。

福州雪峯山故真覚大師の碑銘

大師の法号は義存である。長慶二年壬寅の歳(八一二)に泉州の南安縣(今の福建廈門道南安縣)の曾氏の家に生まれた。祖父以後はみな僧を友とし仏を親として、清らかに志を謹み持しておった。大師は生まれながらに脣のものを退け、襤襟のうちから鐘磬の音を聞いたり僧の姿や仏像を見たりすると顔色を改めるというほどであった。愛情こまやかな母親の膝を離れて、九歳の時に出家を願い出たが許されなかつた。

十二歳の折、父に従つて莆田(今の福建廈門道莆田県東南)の玉潤寺に遊んだ。寺には行を持して高潔な慶元律師という方がおられた。師はにわかに律師を拝して「わがお師匠様です」と申され、ついに寺に留まつて童

子となつた。十七歳に出家されたが、まことにがこもり質朴で正しく古則を守る生活で、余輩とは異なつていた。武宗皇帝の乙丑おつちゅう（八四五）の破仏に及んで、髪を伸ばし儒者のいでたちで、ひそかに叢を分けて福州府の芙蓉山にやつてきた。宏照大師芙蓉靈訓は一見して常人にあらずと見抜かれた。そこで師はそこに止まつた。翌年宣宗皇帝が即位して仏道を復興したが、変転の世に動ぜぬ修養を深く積み、大きい衣を翻して北に向い、吳・楚・梁・宋・燕・秦の各地に遊学した。具足戒を幽州（范陽　はんよう）（河北省大興県）で受け、それから名山を巡り、諸禪德の門を扣いた。それはちょうど雲の空高く天翔けるように、鳥の自在に翻つて飛ぶようである。そこで武陵（朗州のこと、今湖南省常德県）にやつて参り、一度徳山に相見してからは止まり、それから別れの挨拶をされて山を下られた。徳山の大衆は誰も師の境界を測ることができなかつた。徳山は評して「彼はひとり抜ん出てともにするものはいい。われは彼を得ながら失なつてしまつた。」と言つてゐる。

咸通六年（八六五）、師はあの芙蓉山に帰つた。ちょうどその年田寂大師もまた澑山（湖南省寧鄉県西一五〇

里）から徒を引き連れて福州にやつて参り、王真君が上昇したといふ怡山（福州城の西南）に住した。その徒に熟という者がおり（彼は師と同じく徳山の法を嗣いでいた）、しきりに尋ねてきたのに、師は決して会おうとされなかつた。

さてここに行実という者がおり、師の徒と語つていうには、「師の道は巍々と聳え立つといふべきか。それにふさわしい寺を建てる山川の地は簡単に決めてしまうべきではない。その地は釈尊の説法された靈鷲山獮猴江といふような故事にならつて決すべきである。福州府城の西二百里に山があるが、そこは四方に邑がめぐり控えており、山は万仞のように高く聳え、高々と空を支えるようであり、清流も小さくしか見えない広々としたところである。奇岩古松は亀や鶴も棲むほどに古色蒼然としており、神々しい池や深い谷には竜や雷が潜んでいるのでおり、神々しい池や深い谷には竜や雷が潜んでいるのではないかとまごうばかりである。山の頂の半ばは先の冬の雪を残して盛夏というのに寒く、山の樹木はみな藤蘿が纏つて垂れ下つており、草が生い茂つて衣をきているようであるものの、それらが入り混じつて、姿形の奇異な貌を露呈していない。景色のすばらしさは言い尽せな

い。霍童山（福建省寧德県北七〇里）や武夷山（建陽の北一二八里）といつてもこの山以上ではない。まことに閩越の中でも神々しい秀でた山で、古仙さえもいまだ居らなかつたところである。全くわが師の入山を待つてゐるというべきだ。祈念して共に設営しよう。」と述べた。

秋の七月、雲を穿ち苔を踏み、險難をわたり、奥深く昇つて、かの所に達しようとした時、師は「眞にわれの居るところだ。」と言られた。その日の夕方、果して山の神は靈驗をあらわされた。翌日は巖や谷は爽やかに朗らかで、霧が飛動する。雲の庵は既に立っているし、月の構えはかえつて隆んである。ここに及んで法輪を無為に留め、空門を有地に樹立した。行実はそこで山の名を「雪峯」と名づけんことを請うた。冬には雪ふり夏なお寒きことをもつて、靈鷲山彌猴江の義になぞらえたのである。雪峯山の設営は庚寅（八七〇）から乙未（八七五）に及ぶ。師はこの山に等しい徳業を高め、この山は師によつて天下に名を知られたのである。天下の僧たちは辺鄙な地にもかかわらず、あたかも召されるように趨いた。

乾符中（八七四一八七九）には觀察使であつた京兆の

雪峯に関する資料の検討（鈴木哲）

韋岫が、中和中（八八一—八八五）には司空であつた頴川の陳巖が、かねがね醍醐の如き雪峯の仏法を求めながらもかなはず、ここにこもごも切に願い求める使いをつかわした。そこで師は府に入つて願いに従つて法を演べた。その時、命令を京師に復奏する宮中の臣があつて、宮廷で雪峯の道行を語つた。その同朋の中に俗界に抜んでて空を悟る者があり、都を脱して出家を願い出した。僖宗皇帝（八七三—八八八）はこのことを聞いて、翰林学士をして閩の陳延郊に問わしめ、実のままの奏を得た。ここにおいて真覚大師の号を賜い、陳延郊をして紫袈裟を授けしめた。大師はこれを授かつてもまるで授からぬよう、紫袈裟を掛けてもまるで掛けないようであつた。

幾夏も雪峯山に居つたが、辛亥の歳（八九一）のはじめ、にわかに旅仕事をした。弟子が尋ねても行く先を告げず、雲の流れに従うように東の丹邱（浙江省寧海県南九〇里獅山の近く）・四明（浙江省鄞県西南一五〇里）に遊び、明年（八九二）福州城は侍中（王潮）の：（欠）：に尅ち、王潮は兵を仏法の雨に洗い清め、つつしみを禪林に奉げた。そして師の仏道をすぐれたものとして常

に東望して頂手した。のち二年（八九四）して吳より閩に還り、大いに尊敬された。現今閩王は民衆に誓つて民生の安定につとめるの外に、もとより仏道を隆んにしている。おおよそ僧に齋し寺刹を構えるにつけても、それを師にはかり、師のために院宇を増し仏像を設け鐘を鋤いて、雪峯山を莊嚴し、布施を豊かにして衆僧に充当した。時には迎えて福州府城の東と西とにある上屋敷を宿舎として、灯油と法幢を厳にして、法輪を聞き、時を過ごしてしまふのも常であった。十二年余も手厚く懇ろにして、力強い武士も感化を受けて誠意を布施であらわし、漁獵の逸民も殺生を捨て去つた。

戌辰の年（九〇八）春の三月に疾^{やまい}を示した。わが王は医者を走らしめたが、医者が粒薬を師に授けても、「自分は病氣ではない。あなたの医術を無みすることはできない」といつて、ついに薬を飲まなかつた。その後遺偈を札に書いて法嗣に送り、手紙をしたためて王宮に別を告げた。夏の五月二日、鳥獸さえも哀しげに鳴き、雲や水も悲しみにやつやるがごとくである。その夜の十八刻（夜半）に滅度した。年令八十七年、僧臘五十九歳であつた。

その月の十五日に塔を建て埋葬した。その塔をみて徒弟たちは皆「雪峯の奇、法堂の峻なるをかたどつてゐる」といった。大師の生前は王者の風があつた。そして没してからも諸の故坎^{こかん}（墳墓）を捨て去るようなことがあつてはならない。墓穴は若干尺の高さ若干尺の周りで、皆珉石^{みんせき}を彫り、火のまじった土に玉石が光り輝き、高々としている。四隅は樹陰でめぐらし、あざやかにそして奥深く、雲や霞も時に入り込むが、風雨に侵される恐れはない。葬儀に参列のためにその日閩に奔つた僧尼士庶は五千人近かつた。閩王の弟嫁の子で民間に降つた近衛の將軍である左金吾衛將軍檢校刑部尚書王延稟^{おとうえんひん}はじめ、祭文を陳べ齋を設けた。大なるかな大師の世に現わることよ。ここにおよそ量り知れないものがある。

僧となつて雪峯入つてより以降およそ四十年。東西南北し夏往秋適の足跡はとても記することはできない。しかもいつも千五百人を欠くことがなかつた。足下にめぐるが如く衆徒が趨いたが、しかし馳せていけば愈よ離れ、師が弁すれば愈よ惑うという有様だつた。そして平生、「三世諸仏十二分教はここに到つてはいたずらに心を労するのみである」と言つっていた。それでも近きに達

したものは若干名おり、第一は師備といい徒を玄沙^{げんしゃ}安國^{とうがん}の院で擁している。その二是可休といい徒を越州の洞巖^{とうがん}に擁している。第三は智孚^{ちふ}と号し、徒を信州の鷺湖に擁している。第四は慧稜^{けいりょう}と号し、徒を泉州招慶に擁している。第五は神晏^{じんあん}と号し、今の府福州の鼓山に住している。分灯の道はみな帝の推奨にふさわしく紫袈裟^{しきしゃ}を賜わっている。そして玄沙は宗一大師と級し、招慶^{けいこう}は元晤^{げんご}大師、鼓山^{こくさん}は定慧^{じょうえ}大師の詔である。

その朋輩^{ほうばい}がはやくもいうには、「法は説き尽くせぬといつても、説く以上は言葉は文（あや）を本質とする。少林の菩提達摩大師より曹渓の慧能大師まで碑を刻んで紀頌していないものはない。わが師についてのみ碑文を残さずしてよいものであろうか。一旦總じて……（欠）：がいうように、『智（者）に従つて、人垣をつくつて集まり、愚を扣いて文を求める』という有様で、老と病とを集めたように、書物は多きを加えていた。師はすでに言辞は避けていた。師の道を飲慕するに、覚えず聳然とし、なんと偉大なことか。恭しく承るに仏教が東に注流して中国に渡つたことについて、その形象が流れ入つたならばその本質が流れ入らず、その本質が流れ入つたな

らばその形象をあらわさない。それははじめ大迦葉^{だいかしょ}の直系は二十八代で達摩大師に至り、達摩大師は六葉で曹渓慧能に止まり、南北に宗を分けた。徳山は南宗の五葉で、大師は徳山を嗣いで今は六葉となつていて。雪峯は元沙・洞巖・鷺湖・招慶・鼓山に分流したが、その道は皆經典を離れて、ただその七葉となつていて。これは言をよくするものを集めて名を挙げたのではない。ただ数公を美めたのである。その葉は繁茂して数多である、「と述べ、懇懃^{いんぎん}に請われた。そこでついにかれがために銘を作つてその求めに応ずるのである。

その銘文にいわく

曹渓分派して誰か南宗を継ぐや。一言卓絶し、六葉雄を推し出す。（雪峯の宗旨は）無物の物、非空の空、輝やかずして明らかに、増さずして隆んなり。縮まれば秋毫もなく、伸びれば鴻濛^{こうもう}もなし。靈鏡あるにあらず、いづくんぞ真風を揚げん。うるわしきかの閩越は、一峯を巍とす。洞壑^{どうご}はこれ異なり、雪霜はまれに同じ。天の師を待つことあり、名を鍾^{かざ}ねて道と協^{かな}い、跡を仙とともに崇ぶという。その徒を奔走せしめて、百千それ群れたるも、幾人近からんか。もと通ぜざるなく、灯を分つて照耀

す。樹本は玲瓏たり、聖君もいつくしみかさね、賢王も敬して重んず。生ぜず滅せず、いつか始めならん、いつか終りならん。貞石にこの文を刻し、その徳を梵宮にあらわす。

【注】

(1) 椎名宏雄氏より、南宋の陳振孫撰の『直齋書録解題』卷十二釈子類に

雪峯広録二巻

唐真覚大師義存語、丞相王隨序之。隨及楊大年皆号參禪有得者也。

とあることを御教示いただいた。全く右と同文が『文献通考』卷二二七に引かれている。文献通考はこの『解題』に依拠しているのである。『雪峯広録』は王隨が最初『雪峯真覚大師語要』一軸に序文を書いたその語録を指すのではなく、孫覺の後序を持つ『雪峯真覚大師広録』と思われる。『解題』によつて『広録』が二巻であったことがわかる。因みに岸沢文庫に『雪峯真覚禪師語録』（或云広録）があることを『新纂禪籍目録』でいっているが、残念ながら見る機会を得ていなければども、おそらく右の『雪峯広録』二巻を指すのではなく、流布本の『雪峯語録』上下二巻と付録を合して三巻とするものをいうのであると思ふ。

(2)

石井脩道氏「『宗門統要集』について（上）」駒沢大学仏教学部論集第四号）で、はじめて統要について検討がなされはじめ、聯燈会要との密接な関係のあることを論じている。詳細な論証は（下）において示されてくると思うが、これで『景德伝灯錄』以降の灯史の展開の様子が明確になつてくる。

(3)

拙稿「渕山語録成立の背景とその性格」（印伝研20—2）参照 この論文の時点ではまだ『宗門統要集』の存在を知らなかつた。ところで、渕山と仰山が父子のように親密な関係でたとえられるが、渕山を通しての仰山の称揚には、渕山下において、そのように強く主張されなければならない大きな理由が存したと思う。例えは大安と仰山との関係も考えられる。この点については改めて研究するつもりであるが、父子にたとえられるのは、ある緊張を経てから必要に迫られて強調されてくるものと推定しておく。その点まで考慮すると、雪峯と玄沙との関係とはあまり似ていないこととなる。雪峯と玄沙の年令は近く（十三歳の差）、また共に芙蓉靈訓に学んでいることもあり、師弟の形はとつてゐるが、実際のところは兄弟弟子の関係に近かつたようである。それだけの信頼と尊敬があつたし、後世の見方では、玄沙は雪峯を越えているとさえみられているのである。『國訳一切經』の『宋高僧伝』中の雪峯章の國訳を参照。

この論文を書くに当つて、駒沢大学の石井脩道氏の御助力を得た。感謝申し上げます。